



燕石  
十種

異本洞房語園

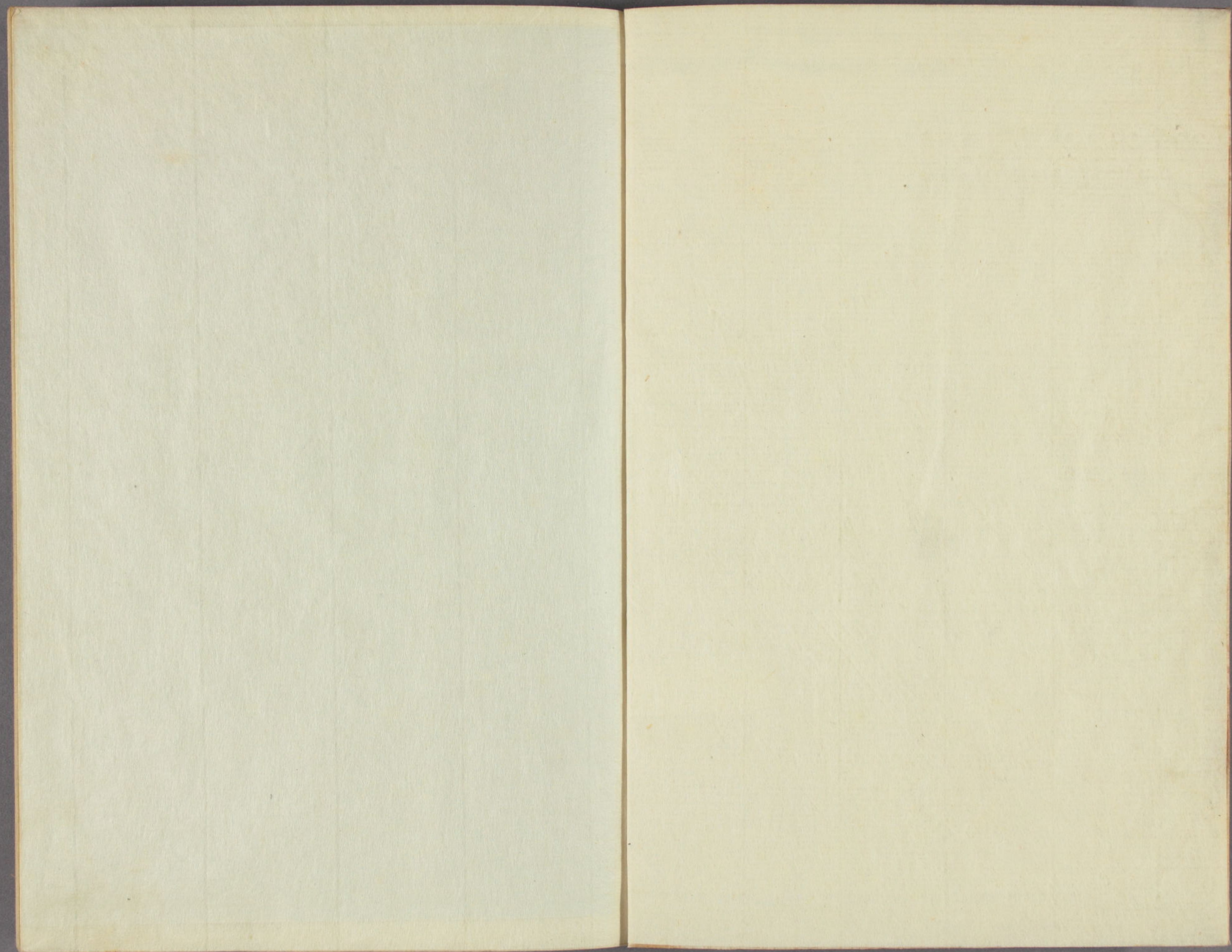
五輯

壹

イ	サ	シ
679		
44		

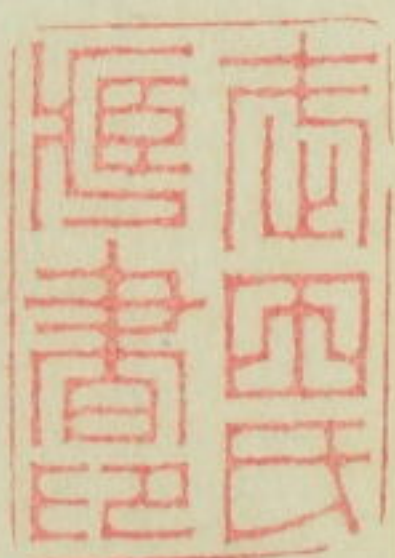








洞房繪圖卷之十



明曆二年 申十月九日 沖喜乃不極の吉原町年号より紙  
 法あり共今迄の場不沙用地的に所屬を發せたり  
 坪廿二急度由請の上中不月ノ後第願日本提の世不角  
 少く代地在中同河之地多も脚の次第由頼の上の由之文  
 坪後以年号在の中不候に口指余年在在由遠方一尺越の院  
 河在迷惑の事存の上の中不不候の急度由信の上由信  
 後以年号在在由候り中不不候の急度由信の上由信  
 相候り一多の日由提の上由提の急度由信の上由信  
 将監極急候後由信の上由信の急度由信の上由信  
 不徳好多り一賜の難有る事存の上由事の上



一唯今迄ハ武所領方の場不あれども新地としてハ武所ノ三町ノ  
所又別増ふ事ナシ

一兵今迄ハ高斗高買致ハ知自今高買ノ高買 御免之

一遠方ハ兵を以テ少主神田乃高買礼ノ町役并出立之儀

跡火消せし事 御免之

一町中ハ武所行余者ニハ風呂を造りて此後兵士ハ是ハ風呂を

際ニ遊女を召置ル事ナシ

一酒川料火を造り又百両取中並ハ 小方高買并  
格付取立

同十月廿七日迄系入町年寄在并月以事儀並治是より

此令願戴仕同侍ノ年寄共ニ兵給後ハ今年ハ月日等より

なれども来去より地形普請ノ取掛り一町由之

明暦三年酉正月十八日未刻本々本妙寺より出火はきき系

と悉く類焼をとり同二月始より役家を建高買より法

國ハ大工法職人ハ當地ニ入出しく此江戸に賑ひ大くありし

日中堤の場跡地形普請も三月中旬の迄より取掛り

又月廿八日の夜小笠原家の侍兵十人斗大門口を突入す

欠落者を付迎しより掛止内將監へ大門口を突入の出入をとり

くればと教育大門口の番人又町中へ告知し大門口を力く

穿鑿をせしむ彼欠落者ハ江戸町或丁の河原より捕られ

たり類焼之後町中の本戸ハあり又丁中ハ大正路筋より

或丁めの河原ハ大正路よりありと傳といひ一若波欠落者

出合琴柱より御きの斗ハ取直りより少々の隙より役家の

取付の隙より柄杓一連波止ハ此所の取付と異名を

取寄り



六月又々吉原町幸安を去る出尚十二日遊る悪く引移可  
し申文 徳川公を去る今戸多誠山谷わく乃百姓在る文治後  
ひと吉原町の老を尾安智ふ有家地出集のるを右之所の  
老宛毫を借す申 宿屋と候いお對に三改申文 徳川公  
六月十日十二日少は吉原此をいとも徳川公の河原より  
尾形舟よりあつて釣形堂へ是もとり山の宿舎就かれり  
舟を是もとり知者乃方より泊者を調へ送り見家  
乃取もて或を浪子親者よりあつてあつて此編笠杯  
あつても候と候ひくあつたり引移女もとり浪子  
町乃賑ひ跡より本堂西南の櫓千少は是を見物とんと  
群集の法人の因幡多礼あつてのり也  
同七月中に吉原徳川公出来り八月十日前も町を去る

悪く引移る家此の町は今戸村多誠心若く三ヶ所乃表  
通り家々を借す二十餘口直候れ高買あつたり  
當は月夜法寺の極楽吉原乃場不活見あつたり  
また山城と称の家初ふ大門よりそのまを去るを地り  
より神尾徳前も極楽吉原より三曲の地りより又十回  
道と云又坂を衣紋坂といふ吉原へ入る人廿坂といふを  
うりあり大門の門見申す少く心算を拾人より十人  
あつたり坂より鬼く衣紋をかいつて衣紋坂と  
名付

等歸むり葉陽子も信也叔代の百姓と云ふ日本堤此  
年教乃事を去るりもくも持りいりやう祖父が時分より  
り地へは唯今より百年よりり以前大申此は吉原の



中取山と申田舎乃云禁して庚申此事を大申と申由  
然くは年号ハ元和七年一尚

美治の次京所新屋の家り一ちとせといひ一ちまあり  
全盛とも故去因よあ〜んけふとせよ別保一人と感歎  
揚や平九郎のち方〜く樹を折〜く例ふ所り〜一観を  
川等せ

一雙ノ玉手千人ノ枕 半點、朱唇萬客掌

と鼻紙よ言は〜をよとせを見〜是や何といふものや  
と可〜時唐人の待下やと斗差〜らんり子とせの如か  
とりも習を好〜の如も尋常〜て奇書あをも好  
〜たふ押返〜待たぬハ何と申事少〜はと問たハ  
さす〜に出来合の喧もつ〜是は是ハ古き侍〜と唐も

或丁目よ仁ち事〜といふ者温腕とは切を商〜一人あ  
赤尚を扱〜とは切を仕〜銀目入る〜ようふ瑞紙  
せいの下由あ〜あ〜〜ちんどんとば〜名付〜り  
世もふ廣

花女丁を仕来〜お拾子蕪を覗き〜いせいのを見物  
をも考を交〜してととり此の流〜いひ音系〜は〜と  
んぼ〜といふも義理も文字もま〜す以曆の次乃男  
達ふ脊合紐といひ〜一紐の男達〜〜ト書みの物寄  
よ

尚世の〜〜〜〜〜

あれ〜〜〜〜〜

風俗の異極〜〜〜〜〜











なるとめさねり帝は法敵の智徳を惜ませめひやうし  
とつめ乃事もあつて後めい葉列乃刺史とて大なる  
ちりりし昔は法敵の扇を顔に隠されしがかれ  
銀鏡の由答人はその遠き島の神も見へた大なる素顔  
しむしむの咄ありり道狭くぬ御代の是も  
目出度き先り一歳屋

吉原大全中行司  
八幡年中に戸下  
日巴屋源右衛門の高  
らりとてその高  
をうらひかたをゆ  
ひつせし八幡教  
の物事をしるし  
みし居る白をゆ  
あつちやうへり  
所てふきりりり  
かたは後測をか  
を八幡の白むを

吉原は拉女とも八幡は白山袖を志すも古來に衿を志  
り寛文の始に彰所家とといひ一考の家は夕魯とい  
くちま嗜りた女めく二月八幡にも小袖と衿と二通り  
は仕立りり下とせの八幡はもつて次をき事あり他の  
女所は衿を志しつちに夕魯を志すありお趣は白山袖を  
志りりまをよ外に女所より見分りてり他の拉女は  
をりり夕きりりは負しつて八幡は殊異しつ  
とも河も綿を入小袖は仕立志しつてそと流し衿の介  
小袖は衿より取形もつて見申る今ふ止しつて汗を流し  
あつても小袖を志す事彼夕魯ふあらひつて

京町さうし屋及あつた家の尾といひ一志まよ二三度  
志する人ありが古教持の医者志居といふ考を述付る  
尾が小袖を一つ貰つて志すいがかもい考ひやうふ執向いとい  
同れし時志居あつて志すて悟り目をふさぎ強を帷  
幕の目しめりり勝子を千里の如く求めあじ  
いりきり別らるい敷つて是のは免免の方使  
こもり来し又日と約束の日あつた揚屋がらめては宴  
の侍定めし志ま松しつて市前も志がふりませうそ



時てう舟斗を感おせ然らぬが此所の内側へ入りてち  
ま振の由をいふこぼりすす友のつとりのませこいふ  
清前の子を押し酒をたかます待きのふれ酒があ  
うりてちも香けぬと終られませ然らぬが此酒を  
をつぎまねて湯く酒をうけまていふ袖の  
石をまいたま振れ袖の進せられませこいふは  
小袖を脱ぐ衣をませこいふと東店が一代の智恵を  
振ひ出さるれは是の面白執向とや物に十五日は随分  
味をわれとくけとちり合をね十五日は約束とく揚  
屋長き信がうさくちまを尾も座あまの亭をいふを  
おさば常のめくちま一つ積て客へさけ兼ては又篇も  
六つんも盡れ敷まりて身よ高ど飯飯向の答あられ

東店いともや一ひがていふ同めかけんとあふは胸を  
まて初秋の時うさや身鑑ひ一目くをせと客  
此飲やう吞ぬやう知まぬさうよちま振の由をいふ  
清を感ませして虎が持て居る鯛鯛川をいふつぎけ  
く酒をたてりあけ客の捧もをせま川一粒をい  
始りて尾の生れ舟神妙におうとちがけり女あは  
東店が解りよま喋り氣味を思ふか不真と思へ  
ふ東店も仕とが遠いこいふとちもねやうまぬ事か  
れを是はいひ扇相を致まていふ袖のゆされませ  
ちま振乃をいふ袖ををせられませこいふを尾のさ  
りてやうのまんをねよせいひけりまていふは  
あし宿の袖を二つ風呂あよこく持来あをいふは



は浅黄之垢きつ又玉時二重の石餅つきニツたよ男むきよ  
は立一袖之客人を高尾の总刺一袖をくらをきまれ  
ふも尾がむげの唐うぬ左東店が孫中を用のまき  
はたせむるも柄のあくす始うそ小袖をたもれとも  
程よきやれあは是程もさういふまのものを東店が智恵  
ぶとをううれぬ去唐くれ買ひとくとも女帝のむ道  
を柳ふよおのしひあひしあがらればこそかへる事もさうり  
是も高尾がも柄といふ事

六帖  
あふむむ  
むの其屋もハ  
むむむむ  
うむむむ  
うむむむ  
うむむむ

かふる心谷の茶原うれと君がまことと思ふたうやむら  
是もねらうてさる余所の見も自といふもぬ家とや  
よお芳ひやもか谷のま

同一は吉原のくちを報持あがる唄ひ一う唄ひ  
あやう月のも菊ひあふみ方では二味線をとっヒイテかん  
あくさんぶはいよこの歌は何よりいとおひらせうの  
あゆまうの是くこれ志は去よう此錦子や純子此幅  
度此茶帯あややねんうう草薙おせめく名をさ  
こあやや誰をぬ尾よ唐雲ふむうさ記は一八橋屋橋よ  
も尾芳世見て来くくもれ女房もれあのかや純本町の  
まけおよ志やしくいせく控いいてをうう芳世はさ  
まのぢすらん登のねも一めいよう一これおとさよ  
出合たキヤありうり出い名ううまのさけう一油世の  
はらうあゆ一いよま福をうてあうのよ形广をいれては



テニテレックテンを教く合点の親をまごく海んをさる教書と  
さきり海んをさる不便とありめしとおとらんをさるし  
海んせまんせまんしとせ同くれあふお情をおさけを  
海んしとさるふきりのらんてき羽織う川いで虫  
おうしあふおとれよあをあをぬかぬのらんせん女房  
あもあひまんしよヨリしとのヨイさるんあうのれもひのい  
れどやらの

名とせ

一振ぶりさるあふのよみりし吉田と誰も夕陽落雲  
晴るあをキツト見らんバ月乃極れ雲井は輝く去る吉  
君を異國家於三國一此三吉君とよ誰もせきあゆと魚  
ふそぬ中小思ひを志望は浦波やあふせくるお情し

ふとせあふもかきしあふ警ししと彩るよひれあふや  
うもあふも中を左京と思ふぬ京あし八橋決をれ  
猪ひハ惚ひのあをさくさや梅う枝うゆるさるれ初音の  
いとあふししやさるもたまぬ

去るハ新町去る左邊つう家の吉野と去る京町三浦  
う家の吉野或人たよ名産し古ゆえ同し次拾子女席  
あふは天王といひしは京町さるしあふ局の胸心新町  
建物の井筒南町さる砂屋のあふも同町万文字屋乃  
あふしあふ世に人の細長うよの上る癒のよれ名をえ  
或人吉原の京色風情を帯負ふ地さるし待る

戯題洞房

新邸江都地

青樓多美人



珊瑚翡翠枕  
懸思武藏鏡  
朝々雲雨契

錦綉鴛鴦茵  
締情常陸紳  
夜々換郎親

其二

未入仙宮觀美婦 洞房先覺勝姮娥  
天成翠黛豈知盡 父目紅顏不用磋  
蘭麝閨中香馥郁 梅花帳下鬢鬢鬢  
曉來相送柳塘畔 夜々新郎遍經過  
張文成カ之遊仙窟ニ曰賭レ宿十嬢問テ曰若為賭  
宿下官答曰十嬢輸レ籌則共下官卧一宿下官輸  
籌則共十嬢卧二宿  
拈女をよといふ宿のまあり

角町了まの屋を居るもの多し了壽といひ一拈女席有  
一人の客了あはれみくくの勤を味畧し一居居る教訓  
をも不用歩捨重くいゆれ女席た乃為あり一はは勤を  
あはせ川あはれ一擲えなるのゆゑにたたり美壽を生  
発明し一量量ある女たはれは是も尚ふのらしめり  
あひ下女たの古布子を借為し一くかも初る京及もな  
女在れ立御一福の事をいふ事を厭を働き或は買との  
あれいふの布子を忘る中一町一も出法も竹を随ふ  
甲斐一御り世に長谷川宗月連希代のお人  
まろく言ふ一あり一が一日居るもの多し一吐舌  
ゆゑ居るもの多し一宗月を答應一を拈女を唱也一思  
一此此をの心く拈女たの人相を見をりた宗月と尚座の







暖平の例ふ三尺は方斗は標をうを背ヶ及といふ者を背  
並く客を門く想石吉原へ入込するに女持七十人抱女の  
数又百指或人の同時の江戸河二丁の右を源右衛門の旗  
標町伏見町とて一の新道を造る標町と角町或自の境自  
たれども標丁といひ伏見町と名付し一事は同不或丁自の年  
号は同元心二所心は元七所右馬の所つまや次々出島因心吉原  
此考たの先祖ハ吉原開泰と云伏見の考町同不豊後橋と  
より引越して考たをんそと先祖の古心を慕ひて伏見町と  
名付しとて始ハ七のの方を考よりり行敷町といふを北風  
ちのより吹おろして考り烈しき風の爲に吹入り籠の  
火を吹消え左に三年の向きを振出り支例は町佐りり  
そ後の若き考たのされふ考りりし踏乗乃考たの引ん  
て考りりするに女持は吉原より考りりしとせいと云遠  
し意定座もたうふぬといふ心して教宗といひあ  
かひひやまぎして終に想名と云り近年教宗見世  
の挿板を加へ廣き座をもりす大格子の内を爲座  
考り挿りしを教宗と對してむの業と教宗と云るが是  
も又世にの本名のやうに減り  
業を女持を吉原へ入込し寛文八年申年中之一日の  
挿板令百文は之は考を局女所といふ挿板或格をな  
りしが教宗ををされく是も考を考りり  
ギウ 教宗より起りし名は業意の以置背を町不泉  
風呂乃湯を清といふ考考りしかの家久助といふ年  
久考はひり男考り風呂を女持を引とて考を



扱ひうりけ久脚多しを好む香しが他人のキセルと  
珍きぬ扱ふしは茶巾のふらたを長きまき入せしす  
まり吸ひ火四をのつけしはまきキセルを常もとあさ  
扱よさし居しうりそと久脚の生付せしめく文ちい  
さ尻男が常ふキセルを指し居る形をそ次の著き者  
ともが及のまこれ形は見えなく久脚が美名を及しひし  
かよの風呂をあさし扱ひしはふといまんとそギウが取  
ゆふあざしひふれしうりあづう風呂屋男れ  
美名とみしり

さ穀指やりよ及けつをひ集れこへの侍とも  
細ッ毎し一矢

扱屋所今の尾張屋と又新左衛門が同はあつやま屋  
とさつと扱屋さしうけ思た患のい幸の指屋の男老人  
の癖うし多き病の良は二之夜程の亮く小角の  
起く初く或夜乃七つこの例のめく小角の曲多取  
る侍後うまた患しとあぶ振り返りてえれを曇  
まつる月夜ありしが庭の片端は一抱一斗の拍のよ  
まうりけは乃二扱は思しけある面影の老白髪を若  
うりさしうかれが喉も整をさる大さの老あつ肝  
を消しし迎さうさうい立わぬ入べきよけまはる  
の天性津美減男のおよおさるぬ京性あれば何老あ  
どとさし侍件の老うちあつれし声きあて家  
を汝が多年伝むる福の大明神の汝常く福をを初  
まども汝は扱る賢あしうりなりし汝がしりしと大



果敢乃飾りしる者あれハ早く身帯を纏り後ハ  
バ家の懸昌あしん必と神意をうごあんと云其れ其  
是を以ちまよひをのりて誠ニ有るに神鑑ふてい  
えより一子の事感ん急ニ其れ其れ其れ其れ其れ  
女房乃あもやあせ由神辨をもねませり夜山燈く  
そふ侍せまると云たのりて入之入るりの燈は亦乃  
亦刀を提てよの指のあれえ之れ其れ其れ其れ其れ  
由入を感んし由神酒をうんといひりんりの其れ其れ  
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
を感んし其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
唯ごめあれば彼者叶りて思ひきん其れ二段より  
花どわり迎んとすををるはは刀めりて打倒し之天  
子拭つて飾りしる者あれハ早く身帯を纏り後ハ  
かよりあけし浴衣を着てり面をうりて其れ其れ其れ  
のよあはれ教く小赤擲し連し追ひ拂ひりり盗人を捕  
てそのあはれ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
よあはれ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
るあはれ

江戸町橋を渡るといひし者の店に後おきて相を  
とよあはれ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
町をたどりて店右の店とて其れ其れ其れ其れ其れ  
てりよ年月あうてを別し其れ其れ其れ其れ其れ  
ゆかりおきて十は其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
さし其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ



乃とて途中して病背さつら因果一由を告初りせり  
きとう是を中の人とて歎きほふ日が極食事をしてちて  
仰よりこれ後家やりて侍業の誰彼さるゝ事なり  
厭しゝる漸小思ひ出りゝるが善提初より僧を招き  
進言供養あをせりてまことの身あれば又勤山あふり  
そ次とて系類焼しゝるは年の日あれども家並も立派  
には桐屋が家も平うありて仕旦の客あれども局の  
とてあゝりり或歎きてうふあゆりて治る獨淋あたま  
こ善く居るゝが此八月乃未暗き夜小小雨降て何れ  
やうお漬く世に斗よ局の戸をあゝりておくきとう  
日より誰ぞと善くんを幽りある声しゝてこくまゝ一  
お驚が来るゝいあまのいあまのいゝまゝとう爰とも  
いゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝ  
あゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝ  
七考がいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝ  
すゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝ  
入今一衣物をかりゝゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝ  
の局よ金をまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝ  
やゝゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝ  
思ひんゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝ  
強くつゝ大男あゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝ  
局へ入るゝもあゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝ  
かゝ立能くゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝ  
子丸鬼のゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝ



紙を背古き晒帷子を着て細き竹の杖を持ちて  
以て免あれ常々として居る極よ思ひをけり申すも水川  
をさまぐさあはれはけりて人々も存て極よ極よ  
建始はささうが怪声今八巻が怪しきと感て怪言す  
るは初いさとの後家も折病多りて怪し居る時夜夜  
中よかゝる事を聞せんもさうさうとて例としてさう  
が怪言するは金をまへ八巻があらぬをさう言たり  
又中よ川掘く大なる影あり戸を押しきり出はる  
細りてり金をまへ八巻も十人並ふておごりあはれ尋  
常は圓く力ありといひ知るもあはれは時の振出の古の  
巴女も初やとつらん八巻も大柳の力量決男にんども  
金をまへはけりぬれは統志の如くは入らぬは用ひさす  
揚屋町と要次は親言た出のを欺て搦らん藤子や  
の八巻めはきさうをだまをとて大キふめふあはれり  
と要次が分別と八巻が智慧とははつれどや  
實文の末より延宝のる江戸所助た悪が家よ對馬  
といひてさまあり兼徳の次乃勝心以曆の以此去  
田ふ芳らぬ金銀同下家のいつと福系或人たは極  
子女所まて述ゆふの洋面輝ふ名をこ川と語録  
が及ぬ初まといひりて元禄年中江戸町をわづ  
家の初業といひてさまは藝文容顏をそは曲端  
才一は芸量といひてり初艘の内よ同時よ或  
人乃初艘をわづ初と勤ふ初一日より身法のと  
りよあはれ一日と約束れ日よあはれさうさうはけり



風の思ふなりや——き急風が吹く嫁入してはるり  
去来——客人のよ廣く暮つくる事あるたいどん  
といふ大まきとさする物ももろくを能く御了簡を付く  
大まきとさする古来の本字は大人とある歴々此中事を  
さ——くし是れが村井一露といひ——昔流りの先  
人乃徳やがいにれ——大人と書か本字を<sup>中</sup>あつたタイニ  
こと清く云ふ——だいどんと濁りといふ感と志——  
久安といひあれ——今更改の——そとやり——  
どうあつたおしひあれた漢書其書の各列も入るを  
かやう感吐味をすむ能か——い——思ふよとを思ふれ  
されば彼大人の能買もといふはあんなせいと訓読でもけ  
やけくたをくあつたもあつた城を編り屋敷がず  
或は元あつたをさすもも待よくれ——とれといひ  
が——かぬよのやりやどうのあ——ぐりたが送りて  
答返する事理りえ又稱とあるとのあの中——筆談  
は述る——物——ある世里歴々通る人の勿論義理法礼  
の人傑もつくるん或士方の常の勤は懈怠せぬを方  
を致しねあ——まをまんと廊や——も辛勞か  
らんとし——物——町人の後世乃産業の由りあく  
明あつ——言つたを——その利便の極意あり  
余れ喜ひ慰ももい星をふあれを傾城あど——ね  
み——系図を自説するもつくるは多浪をわけ——す  
もあつた——物——ぬ建歴——此天定を先がけり  
——花を世つ——をり——が余れは先がけり



行々雅子のりんさんつあき急角所志のあく、東の  
つくぬしと一身あれきしと遠き急あきとありとも去  
東の性ゆり揚屋の方への出入ありも人目を忍ぶ所  
のまじりもいせいも奥ゆりしと思ひ余は目もむらり  
く足ゆれなき揚屋の奥の座敷の縁と深編笠も  
又いり

野文明暦の以或丈人此ゆりしし家書と書し  
と是よりしして家書は字を用ゆ大く此人の志あり  
ゆりんとあふ日は船乗する人と船起しそめつこり  
開け安んずる道もまきあしとてとひおせり間を性  
通ふ少もこれ舞足は踏あを足をも向ふりし初る  
人の志をうけ時定ししとて思慮をうか散れ

おをもいしびり遠くは成年の人と世やよきさびし時  
かり法事しありと面をいふ中成りしとあう思耶  
との親にあきの祈をいし忘れず利力とさきあう叔  
傾城を買つといさうといふあうぬ事よ足とて敬業の二  
くいとを踏ぬくともういふ浦川をものたけは成り踏  
或はるもあくしを押し虎やぶりを咄びをいひ口言  
れいゆり方角あうればぎうがあうくと唇もごぼり  
ますしとあけは替れ一角あふともえりれば別添か  
りぬいそあもぬりしとわくゆりぬばあうぬ首尾  
あやといしと漸く支度してゆり時ハ日月の中此十日  
といとも括ひしとぬ宗良ぬるゆりも理りうか是等  
それあいの尻のあうあれたるあみ十六十斗の親にま







もは類いあれは是も江戸の廣き事なりとてそとを  
り

氏家方ハ中間以下賣人ハ初とい振りの類は向く際を  
又今かく古事ハ何れと流さば一冊を完初は燕石私集  
と號号しつゝ大村井一露舟の物語ハ昔宋といふ由上人の  
五成り考もつゝ一の燕石を求むく物も莫くことといひ  
歳をふも包く櫃に入大切しつゝ並り是を知り  
つゝ人の大いあひりつゝ今世一冊を綴りぬの子孫に  
つゝあ後の酒法もあつゝも巧しんと煙草せよと物  
細く並り彼宋人の燕石を莫くといひつゝ一回  
おぬつゝ一の故を系用巻より凡百餘年の事跡あり  
つゝんあつゝ一の故を系用巻より凡百餘年の事跡あり

前後の沿革ハ初合ありとつゝ人の漢州の年の市  
つゝは田舎人多く古事ハ入也つゝ職人曰之是ハ竹と又  
つゝい出つゝハある如都の町並乃懸昌あり幾いを述  
つゝ幾句と序に記す

種一ツ賣れぬ日もあり江戸の表 其南

鬼灯村此結を綴り終りし 一志

又河代の初つゝ中事をつゝつゝ幾句と序に記す

異於の古く聖の法代ハ華の馬をこれと  
桃林と牛を殺すつゝつゝ事今や武陽の  
春もまじ

花の対上世ハ懸る系馬あり 一氣

つゝ一團夢長年つゝ江戸の頃城町用巻も







と有る一々今迄にありし所の傾城屋も所  
減り多かりしが 角少い所下の場和一ヶ所由定有て  
介は拉女之類を一時の世間の為と云ふ理之申すれ  
を山田宗暲といひて 若は養むると同之 弥由所証申  
ふ所免甚右患の之を條の義を申す由歎ひ申す所歎ふ由  
吟味して元和二年より元吉原乃境地在りて編り  
明暦二年酉秋中朝去るうりて六年卯年之

大門の事高札御文云々

一 前々より制禁しおとす江戸町中堀より西迄拉女之類  
一 湯一並屋より西若遠紀に業有る所を名を五人組  
地と云ふ為曲事者也

又月

一 醫師の介所あるより次第物一切を角より一階迄長  
刀門内と云ふ停止しるべき事也

又月

正徳元年卯七月十日 中達啓有

意右患の拉女丁の事沙所証の書後人は其加へて是田



九所右馬門といひ一若を以て元祖を頼寺あり居りては  
 事を行ひせぬも移りて世九所右馬門と名付置置者ては  
 と東の川邊に是是地を同奉と初一慈江戸河川に誠實文  
 入奉の以抱へのちいといふ人并家アとふ家誠近海久  
 出るはるるま三所といふ子代少徳りそ方ハ京長者町川  
 世世同少て仕とるやといふものあり福優と名付け  
 ること九所右馬門といふ子費目好の多波といふなり由  
 子代ま三所分送師と極意とて今よ江戸町より

諸國拉女町

一 武陽後州吉原

一 京都鴻原

一 伏見夷町

志田り町在云

一 同不柳町

一 大坂瓢箪町

一 奈良鳴川

本過在云

一 江州大津馬場町

栄屋丁在云

一 駿名府中添勤町

一 越前敦賀六朝町

一 同國三國松卜

一 同國今庄新町

一 泉列塚北宮例町

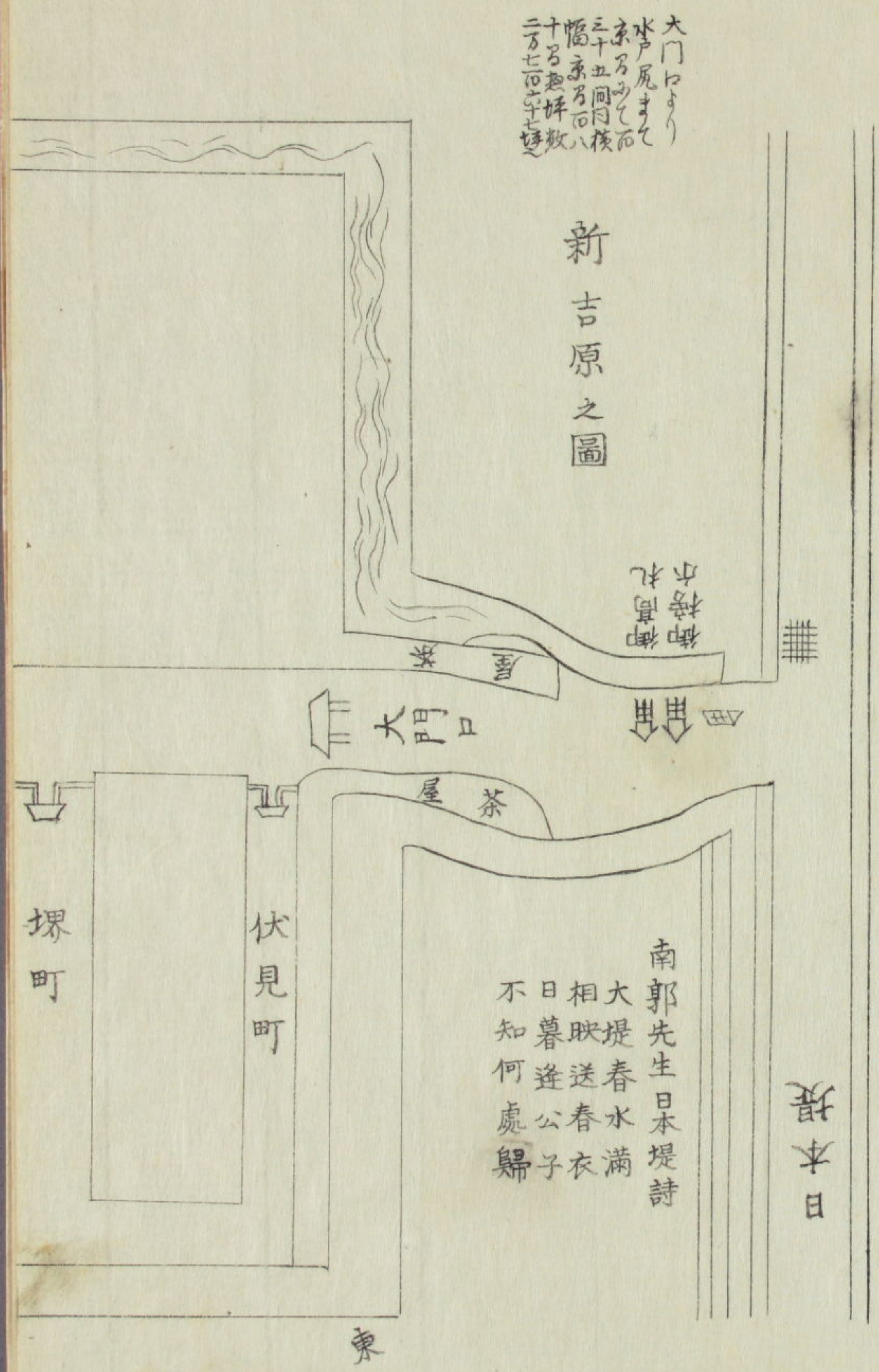
一 同國同不南津守

一 播列去庫破ノ町



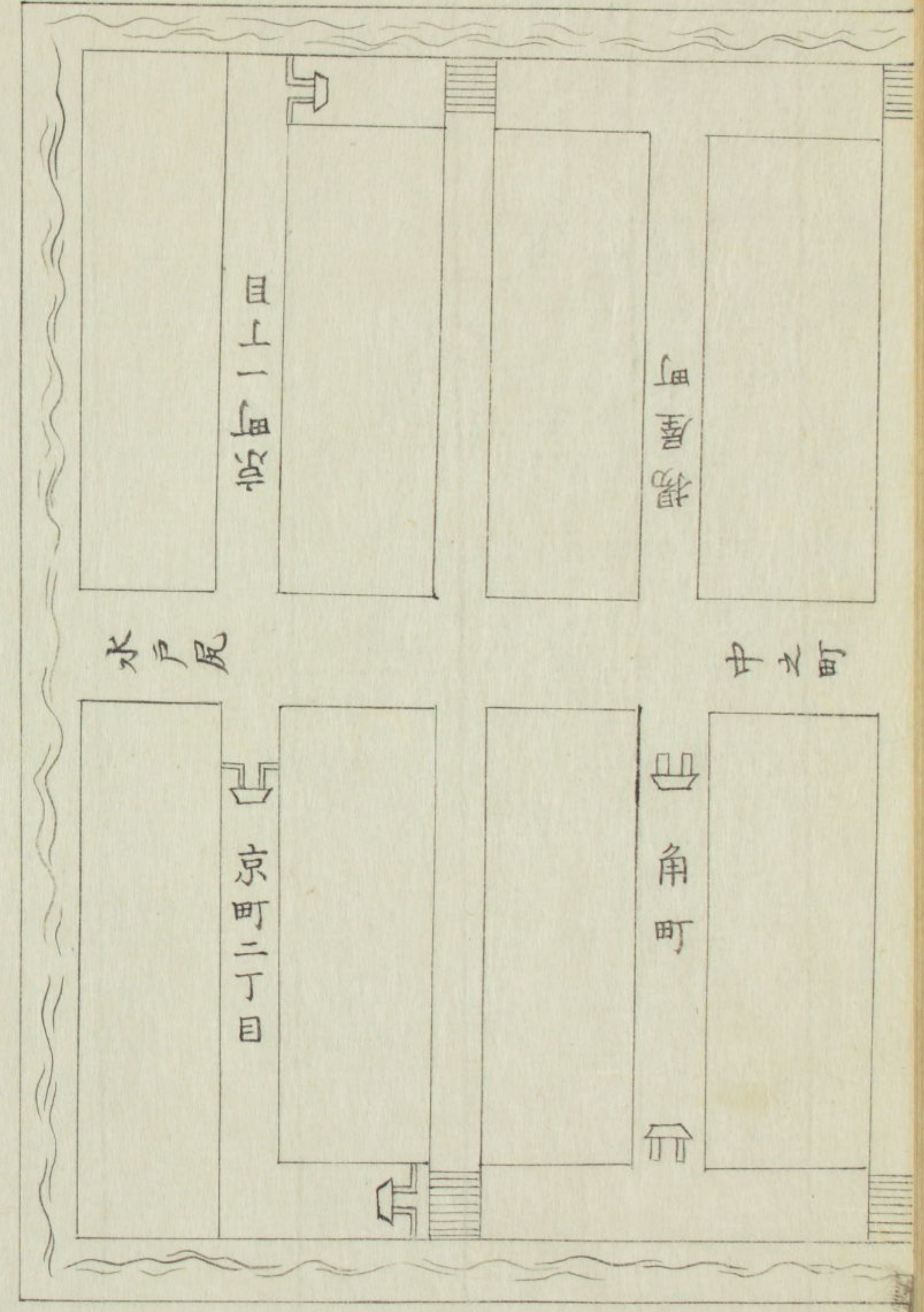
- 一 石見塩泉津稻町
  - 一 仇波鉦川心湯町
  - 一 播列室小野町
  - 一 備後鞆鞆嵐町
  - 一 藝員多古海
  - 一 同心宮崎新町
  - 一 長門下園稲荷町
  - 一 筑前博多柳町
  - 一 肥前長湯丸心町
  - 一 薩列梳碓田町
  - 一 同心心麻野
- 都合式拾入下
- 芳合町在云

新吉原之圖





寛永の初め頃のことは終費者として世より知らるる通り  
 京都からあつていふお茶屋の女芝居を撮る程と程と  
 乃るふ風流ある舞をまじい唄をうたひ男の志願を  
 て木刀を片種々のお茶屋をそのお茶屋も亦り程と  
 そのお茶屋をいふ程のいふ程のいふ程のいふ程の  
 別る金銀を以て仕女と同く客をいふ程のいふ程の  
 多うりいふ程のいふ程のいふ程のいふ程のいふ程の  
 といふ程のいふ程のいふ程のいふ程のいふ程のいふ程の  
 お茶屋の女芝居を撮る程と程と  
 傾城の能を勢い押して流をいふ程のいふ程のいふ程の  
 礼節をいふ程のいふ程のいふ程のいふ程のいふ程の  
 志願の志願を表すといふ程のいふ程のいふ程のいふ程の





の頼にお似て風俗のなまじり小娘さ事古来の白拍子とは  
大に男をとり抱みたりは女を泣かして白拍子を是  
とすも所をも止まをゆきしは是を死とあはば男は  
てまことの歎

羅心先生の女を女の新あり全文を略して大意を信憑  
よ述ぶ

今此女を女と云ふ女は女を男と云ふ女は女を後  
女は男は腹を腹を腹を腹を腹の女は女は女を後  
女を佩懐さ女をうしひ師をまひ声うしま  
男女赤靴りうしひ師を出雲の西に海婦は九二  
いふ若始く是を女す於師は是をうしひ事  
いふ汁あり古の女は人の名をうしひの師女の頼  
いふを女と云ふは女は女を後りまひあれは女  
事と女を好むの女を好む徳を好むのかまうあは  
又不可く戒をうしひ今此女を女を後と云ふ  
まひありまは女を事は是誰か智と云ふ

大意わけしる事略文と



慶安四年卯八月五日、奇縁女座此治帝子結  
 御幸行極々治石川に於て、患う前髪を削  
 落し、男の威に、近年可く、通子といふ者、時益出づる  
 寛永年中九二分頼ひある奇縁女の如く、結髪成りし不  
 是又、此傳止りし、漸止り、當時、御政在りし、治教  
 弘明之、家より、於て、兆民万歳を、歌ふ治  
 御代、その目、出、夜、乃、也

享保又庚子年八月日

店司又左馬書々

一 三浦尾 江戸左馬、抱の、之、尾、七代、也

初代 妙心 之尾 我々、之、子、を、乳、母、の、子、と、せ、居、申、す、也、左、馬、書、之、子、也、

二代目 仙卷 之尾

三代目 西条 之尾 此、前、結、解、為、系、云、云、也、後、也、

四代目 水谷 之尾 水、柳、左、馬、の、後、也、

五代目 淡理 之尾 み、子、也、淡、理、因、幡、書、後、也、今、ハ、新、綴、也、

六代目 たごの 之尾 神、田、の、結、髪、也、享、保、十、年、之、

七代目 柳原 之尾 延、享、三、年、也、

洞房結髪巻之、下、終、大、尾







